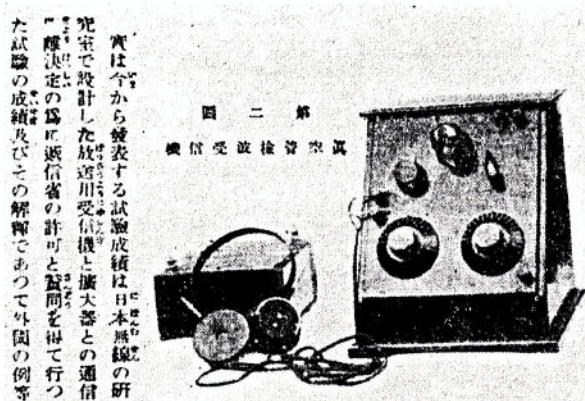


第4章 ラジオ受信機と音響機器

第1節 放送開始とラジオ受信機



放送開始当時の真空管式ラジオ受信機

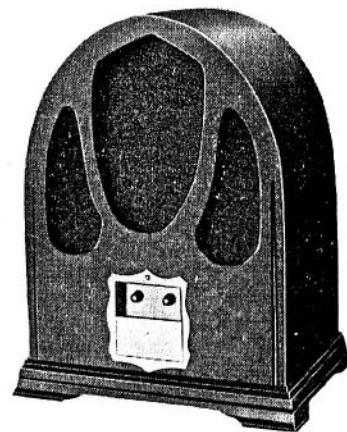
我國のラジオ放送開始に先立つ大正13年(1924)、ラジオ受信機の開発に着手し、同時にドイツのテレフンケン社と提携して、各種部品の国産化も進めた。

先ず、鉱石検波式受信機を、続いて当社の開発になるラジオ用受信管を用いた再生検波式受信機を完成し、何れも逓信省電気試験所の型式証明を得て量産化した。こうして、当社は業界に先駆けて、14年3月の東京放送局開局以前に、ラジオ受信機を市販した。

更に、低周波1段増幅器付きのものと同じく2段増幅器付きのものを新製品として加えた外、テレフンケン社型の受信機も国産化して発売した。これらのラジオ受信機の販売は、極めて順調なスタートを切ることができた。

第2節 ラジオ受信機の売上好調

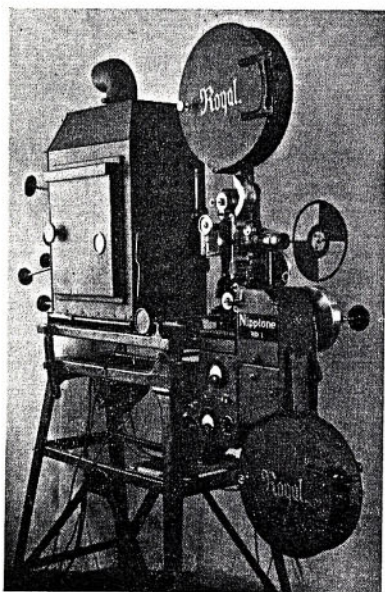
昭和年代に入ると、エリミネータ式受信機の登場と共にラジオは目覚しく普及した。当社は積極的に研究開発を進め、当社製のラジオ用受信管及び部品を用いた新形ラジオ受信機は、昭和5年(1930)秋に、東京日本橋三越で開かれた日本放送協会関東支部主催の全国優良ラジオ受信機懸賞募集展で優等賞を獲得した。これにより、翌年にはラジオ受信機ニッポレット4A型及び4SA型の量産を進めた。この受信機は発売以来、順調に売上高が増加し、6~7年頃は、ラジオ受信機と同部品は当社の重要販売製品となった。



ニッポレットラジオ受信機
(昭和5年頃のニュースタイル)

又、5年には光電管を開発し、これを用いて、翌年日本無線式トーキー映写装置を製品化、全国映画館に販売した。

こうして、売上げも順調に伸長したラジオ受信機と音響機器も、やがて我が国が重大な時局に直面



映写機ローヤルに組込まれた
ニップトーントーカー装置

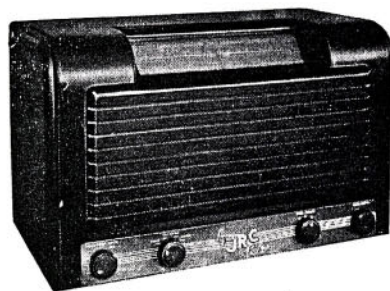
し、当社も軍需生産優先の方針の下に、13年新設の三鷹工場移転と共に、全面的に生産販売を中止せざるを得なくなった。

第3節 戦後の企業再建とラジオ受信機



R-101型 中波
スーパーラジオ
受信機

終戦直後の斬
新形全波スー
パーラジオ受
信機R-103型



戦後の企業再建に当り、ラジオ受信機の需要に再び着目し、GHQに民需生産転換品種の一つとして申請し、昭和20年(1945)12月認可を得て、早速翌月から開発に着手し、3機種の商品化を決定し、翌年4月完成して、量産体制に入った。

ラジオ受信機

R-101型	中波5球スーパーラジオ受信機
R-102型	全波5球スーパーラジオ受信機
R-103型	全波7球スーパーラジオ受信機

受信機には何れもスーパーヘテロダイナ方式を採用し、真空管は当社が戦時中最大の努力を払って完成した12Vのオクタルベースを用いたNシリーズ管を使用した。又、音質向上のため、ダイナミックスピーカを用いると共に、受信機筐体には特に意を用いて、斬新な外観に設計した。更に、周波数目盛りには、初めて直線目盛りを採用し、これをガラス板に印刷して光らせたため、全体が非常に優美な意匠に統一された。

これらの新製品は、21年4月、東京日本橋三越に於て開催された戦後初のラジオ展示会に出品され、暗い世相に明るい輝きをもたらすものとして好評を博した。更に翌22年に入り、小形ラジオ受信機の研究に着手し、同年末には試作品を完成、翌年5月から市販した。同機は空中線を内蔵し、電源は交流式で、性能はR-101型に匹敵するものであった。NR-5A型と命名されたこの受信機には、一般に市販されている部品や真空管を用いた。

こうして戦後復活したラジオ受信機については、やがて販売競争が激化したため、生産、販売、アフターサービスなどの各面から検討を加え、24年2月、ラジオ部門を全面的に新設の日本ラジオ工業株式会社に委譲した。